

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32642

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21411

研究課題名(和文) タンザニアの狩猟採集民による個人の複合的な生業展開と植物知識の変化に関する研究

研究課題名(英文) Development of Complex Livelihoods and Changes in Plant Knowledge among Hunter-Gatherers in Tanzania

研究代表者

八塚 春名(Yatsuka, Haruna)

津田塾大学・学芸学部・講師

研究者番号：40596441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、タンザニアの2つの狩猟採集民を対象にフィールドワークを実施し、複合的に展開する生業の実態を明らかにすることと、その生業変遷に伴う植物知識の変化について、個人の生業実践の経験と関連させながら考察することを目的としている。研究の結果、狩猟採集だけでなく農耕や観光業など多様な生業を展開していること、また生業活動が複合的になったり、定住したりすることによって、植物の利用や植物に関する知識が単一化していくと危惧するよりも、さまざまな活動を通して、多様な環境にある植物を利用するように、かれらの植物利用は複雑化していくと評価できるのではないかと考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民族植物学において、これまで採集と農耕は別々に扱われてきたが、本研究では、複数の生業の変化を連続的に扱いながら植物知識を分析したり、また、知識を個人の経験と結びつけて検討することの有用性を示すことができた。さらに、調査対象の人びとや彼らを支援するNGOに調査結果を共有することを心掛けてきたため、彼らが自分たちの社会の変化について客観的かつ多面的に考察する機会を提供することができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the situation of complex livelihoods and consider the changes in plant knowledge that accompany the transition of livelihoods in relation to individual experience, by fieldwork focused on two groups of hunter-gatherers in Tanzania. The results clarified that not only hunting and gathering but also various livelihoods such as agriculture and tourism are developing. The study hypothesized that through livelihood activities becoming complex or as people are forced to settle, an evaluation of their use of plants would become more complicated. This is because they would use plants in diverse environments through various activities, rather than being concerned that plants use will be intensively.

研究分野：生態人類学

キーワード：生業複合 狩猟採集民 植物の認識と利用 半栽培植物 タンザニア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

狩猟採集民の複合的な生業展開のなかで起きる植物知識の新展開に注目

狩猟採集民は、狩猟や採集といった自然との密接なかかわりを通して、豊かな植物知識を蓄積してきたといわれてきた。しかし狩猟採集民の多くは、農耕や家畜飼養をはじめとするさまざまな生計手段をもち、外部世界と交易をしてきた歴史を有することは既に指摘されているとおりである(たとえば池谷, 2002)。現代の彼らは、定住化や農耕化、森林破壊、土地収奪などといった外生の影響を大きく受け、従来の狩猟採集活動を継続しながらも、外部に開かれた経済システムのなかで、農耕、家畜飼養、出稼ぎ、観光業といったさまざまな活動を展開している。

こうした背景を受けて、本研究に先んじてタンザニアの2つの狩猟採集民(サンダウェとハッザ)を対象に、彼らの生業複合の様態を明らかにしようと努めてきた。そして、サンダウェは農耕を基盤にしながら狩猟採集を維持し、ハッザは狩猟採集に従事しながらも、自らの狩猟採集活動を売りにした文化観光に参入しているという現状を明らかにしてきた。その調査の過程において、サンダウェが自分の農地に生える雑草性植物を「採集」し、副食の材料として利用していることを明らかにし、生業の複合化により、利用する植物群に変化が見られることに気が付いた(八塚, 2011)。このことから、狩猟採集民が、狩猟採集活動を通して蓄積してきた植物知識は、彼らの生業活動が多様化する近年、非常に複雑に変化を遂げていると推測できる。また、その変化を追うためには、自然資源から食糧を獲得する生業活動だけに注目しても精密な理解にはつながらない。そこで、「生業」を食料獲得活動に限定せず、文化観光などの自然資源やその利用を基盤とした現金稼得のための多様な活動も含めるかたちで、生業の複雑化と植物認識の変化との関連について考察することが重要だと考えた。

個人の生業実践と関連させて植物知識の変化をみる視点

1950年代の Conklin, H.C.による研究以来、世界各地の人びとによる植物の認知、分類、命名に関する研究は多くなされたが、そのほとんどは民族を単位に分析がおこなわれ、対象植物とかわる個人的な実践経験を踏まえた個人の認識体系の差異に注目する研究は決して多いとはいえない。また、その個人差が性差のような個人の属性ではなく、生業活動をととした個人的な経験とどう関連するのかといったことは、実はあまり明らかにされてこなかった。しかし筆者はこれまで、サンダウェを対象にしたフィールドワークにおいて、19世紀中頃から農耕を始めたといわれている彼らの景観認識に、個人の農耕実践が強く反映されていることを実感してきた。それは、彼らが植物を栽培する一連の作業を通して、彼ら自身が個人的に環境と結び結んだ関係から、該当する景観に対する認識が形成されているからだと考えられる(八塚, 2012)。現代の狩猟採集民は複合的に生業活動を展開しているが、生業実践は個人の経験の積み重ねであると同時に、個人は他者との関係性のなかで変化を取り入れることから、個々の生業実践の変化を踏まえた視点からの分析が必要だと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、近年、複合的に展開する狩猟採集民の生業と、その過程で生じる植物知識の変化の関係を、個人の生業実践の経験と関連させながら考察し、現代狩猟採集民の人と植物のかかわりを多層的に描き出すことを目指している。具体的には、タンザニアの2つの狩猟採集民を対象に、狩猟採集以外に農耕、家畜飼養、文化観光といった複数の活動の連続的な変化の流れのなかで彼らの植物知識を位置づけ、個人の生業活動の展開の方法と、その人および周囲の人たちの植物知識に起こる変化について検討を重ねる。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の3つの課題を設定し、タンザニアに居住する狩猟採集民(サンダウェとハッザ)を対象に、生業複合の過程を把握するとともに、彼らの植物知識の変化について考察する。

■ 課題 現在の生業実践を理解し、その複合の様態を個人レベルで捉える

農耕や家畜飼養、さらに観光の普及の過程と、個人レベルでのそれらへの参入の差異を、近隣民族関係、国家政策、他の生業活動との関係といった多様な側面から明らかにする。また、現在の複合生業における農耕の位置付けを検討し、植物を栽培する行為が彼らの植物に対する認識体系に変化を生じさせているか否かを検討する。

■ 課題 植物知識にみられる の影響を分析する

数種の植物に焦点を絞って、その植物に関する採集や利用、また認識について個人を対象に聞き取りと参与観察を実施する。これによって、生業複合というダイナミクスのなかで変化する(あるいはしない)植物知識の特徴について個人を単位に分析する。これらの結果をサンダウェとハッザで比較し、変化の多様性を捉える。

■ 課題 生業複合の意義を人と植物の関係から検討する

課題の結果を踏まえ、狩猟採集社会における生業複合の過程を連続的に捉えて変化のグラデーションを示し、そこに課題の結果から植物知識の変化を加え、生業活動と植物知識との関係の多様性を考察する。

#### 4. 研究成果

本研究で明らかになった3点を以下に示す。

##### 生業複合の多様なかたち

19世紀にはすでに農耕をはじめていたと考えられているサンダウエは、ほぼすべての人が定住し、農耕をおこなっている。他方、農耕以外の生業活動への比重は、世帯や個人により異なる。一方、タンザニア北部のエヤシ湖周辺地域に広域に分布するハッザは、居住地によってその生活様式が大きく異なる傾向にある。たとえば一切農耕に従事せず、狩猟採集と観光業に多くの人がかかわる地域、近隣に暮らす他民族の畑で日雇い労働に従事する人が少ない地域、自分の畑を所有し雨季に農業に従事する人が多い地域など、大まかに見れば、地域による差異が大きいといえる。その原因は、近隣に暮らす他民族の生業活動や彼らとの関係によるところも大きいと考えられる。また当然のことながら、地域内でも個人によって各生業の比重が大きく異なるようにも推測できた。こうしたハッザのケースは、先述した近隣民族との関係のほか、民族内の関係や季節変化などの多様な条件によって、従事する生業をその都度選択しているようであった。それゆえ、彼らは異なる地域間を移動することによって、頻繁にまた柔軟に、自らがおこなう生業を選択していた。結果として、広域に複合生業を実践していると考えられた。

##### 植物に対する認識や利用に関する個人差とその背景

植物認識と個人の利用のあいだにみられる関連を検証するために、植物学的には1種だと考えられる *Albizia tanganykensis* を、サンダウエが異なる名前をもつ複数に分類している事例について検討を重ねた。形態や利用に関する知識を聞き取ると同時に、個人の家屋周辺で生育する個体について、それぞれの世帯の構成員に識別してもらった。多くの人はこの植物を成長が早いと理解し、定住している家やトイレの垣根として移植していた。個人は、そうした自分の身近にある植物個体の形態を自分の知識へと反映している、つまり、植物個体と個人が結んだきわめて個人的な経験をもとに、植物を識別していることが明らかになった。それゆえ、小さなコミュニティ内であっても、人により識別の結果が異なっていた。また、生業活動や他者の訪問などを通して叢林内をよく歩き、野生状態の *A. tanganykensis* をよく目にする人（多くの場合は男性）と、そうではない人（多くの場合は女性）とのあいだにも、認識に差異が生じやすいこともわかった。

以上から、生業活動といった彼らの生活の基盤となるような活動もさることながら、日常生活のあらゆる場面における植物とのかかわりが、植物の認識に変化をもたらし、それらの連続によって、植物の知識が構築されていくと考えた。

##### 人と植物の関係から検討する生業複合の意義

狩猟採集民の植物利用に関しては、狩猟採集活動を通じた植物に関する知識や、薬や道具といった日用品としての植物利用など、彼らの周囲に存在する植物をいかに利用するのかといった知識と、その利用の持続性が主要なテーマであったといえよう。その際、農耕や出稼ぎ、観光などの比較的新しい活動や、他民族や都市との関係が強くなることは、あまり歓迎されることではなかったといえよう。しかし本研究のフィールドワークにおいて、狩猟採集民社会に農耕が定着したことで農地に生える雑草を利用したり、他民族と接触することで新しい採集場所を獲得したり、定住し家やトイレの囲いを設けることを通じて植物に関する知識を獲得していくといったようなことが観察された。以上のことから、生業活動が複合的になったり、定住したりすることによって、植物の利用や植物に関する知識が単一化していくと危惧するよりも、さまざまな活動を通して、多様な環境にある植物を利用するように、かれらの植物利用が複雑化していくと評価できるのではないかと考察した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 八塚春名	4. 巻 41
2. 論文標題 雑草を増やし、食べる タンザニアの半乾燥地における副食の嗜好性と食料政策の再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本大学国際関係学部 生活科学研究所報告	6. 最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阪本公美子・八塚春名・須田征志・津田勝憲	4. 巻 47
2. 論文標題 タンザニアにおける薬用植物知識の地域性と多層性 秘密・情報共有を選ぶ住民と伝統的医療従事者	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yatsuka, Haruna	4. 巻 11(54)
2. 論文標題 Sustainable Hunting as Commodity: The Case of Tanzania's Hadza Hunter-Gatherers	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 電子マガジン Global-e	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 八塚春名	4. 巻 92
2. 論文標題 タンザニアにおける狩猟採集民ハッザの観光実践 民族間関係、個人の移動、収入の個人差に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 27-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 八塚春名	4. 巻 -
2. 論文標題 タンザニア、土地不足とダム建設をめぐる人びとの葛藤	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 電子マガジンSYNODOS	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 YATSUKA Haruna	4. 巻 94
2. 論文標題 Historical Interaction with Neighbors from the View of Livelihood Change: A Study of the Sandawe of Tanzania	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies	6. 最初と最後の頁 81-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Yatsuka, Haruna
2. 発表標題 How the Sandawe people encourage the growth of "edible weeds" in their crop fields in Tanzania
3. 学会等名 16th Congress of the International Society of Ethnobiology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yatsuka, Haruna
2. 発表標題 Attitude of the Hadza Hunter-Gatherers toward Tourism in Tanzania: Individual Cash Incomes through Selling Souvenirs
3. 学会等名 The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS 12) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 タンザニアにおける狩猟採集活動と観光とのかかわりに関する地域的差異
3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 「雑草」を増やす タンザニア、サンダウェによる耕地のニセゴマ「管理」
3. 学会等名 日本アフリカ学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 気乗り薄なホスト タンザニア、狩猟採集民ハツツァによる民族文化観光
3. 学会等名 日本アフリカ学会第53回学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 『気乗り薄な態度』が維持するホストの生活 タンザニア、狩猟採集民ハツツァの民族文化観光
3. 学会等名 観光学術学会第5回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 YATSUKA Haruna
2. 発表標題 Hunter-Gatherers Tourism in Tanzania
3. 学会等名 Workshop on Participatory Tourism in Africa (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 深山直子、丸山淳子、木村真希子、清水昭俊、上村英明、宮里護佐丸、鈴木佑記、石垣直、山本達也、水谷裕佳、アンエリス・ルアレン、斎藤剛、久保田亮、ミカエラ・ベリカン、小西公大、高橋絵里香、中田英樹、八塚春名、山内由理子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288 (240-244)
3. 書名 先住民からみる現代世界	

1. 著者名 八塚春名	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 169-174
3. 書名 「狩猟採集から複合生業へ タンザニアのサンダウェ社会における農耕と家畜飼養の展開」(池谷和信編) 『狩猟採集民からみた地球環境史 自然・隣人・文明との共生』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----